

## エペソ人への手紙3章20節 「行うことのできる神」

### 1A 神の能力

1B 不可能な祈り

2B 人の能力で神を測る過ち

3B 神の働き

### 2A 内に働く御力

1B 内なる人に働かれる御霊

2B 肉の力からの救い

### 3A 願うところ、思うところを超える方

1B 異なる神の思い

2B 神の豊かな知恵

3B 信じ、従う心

## 本文

エペソ人への手紙 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、2 章まで来ましたが、午後に 3 章を一節ずつ読みます。今朝は、20 節に注目します。「3:20 **どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、**」

### 1A 神の能力

#### 1B 不可能な祈り

このパウロの言葉は、彼がエペソの人たちのために祈りを献げているところの最後になります。そこを読むと、なぜパウロが、神のことを、「**私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方**」と呼んでいるのが良く分かります。

19 節に、「**人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように**」と言っています。これ、文法的に間違っただけをパウロが言っているのではないかと私たちは思いますよね？人知を超えていることを、どうして知ることができますように、と祈ることができるのでしょうか？そして次に、「**神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。**」と祈っています。こちらも不可能です。神は、天も収めることのできない大きな存在です。こんなちっぽけな自分が、どうして天や地も入れることのできない大きな神に満たされることができるのでしょうか？ですから、この祈りは、私たちの能力をはるかに超えた祈りであり、それでパウロは、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えた方と、神を呼んでいるのです。

私たちは、あまりにも自分たちの理解力や知力で、物事を把握したいと願ってしまいます。しか

し、自分の理解できない不条理にさえ思えることが起こった時に、神の知識が本領を発揮します。むしろ不条理に思えることが起きている時に、神の愛がどれほど大きく、広いのかを知るきっかけとなります。自分では到底、思い浮かぶことのなかったことを、不条理に思える中で示してください。自分には全く知りえないことを、神はそういった試練や苦しみの時に、こうなのだ、と教えてくれるのです。

私たちは、信仰生活が何かテクニックのように考えて、「これこれをすれば、こうなるのだ」というプログラムの一貫のように考えてしまいがちですが、むしろテクニックはまるで通用しないところに置かれる時に信仰は養われます。自分ではどうしようもないところに置かれて、そこで、不思議にも「ああ、神はこのようなお方なのだ」と悟りが与えられるのです。頭で考えたら全く理解不能なのに、なぜか、人知を超えたところの平安が与えられます。これこそが、奥義の啓示です。そこで、信仰が養われるのです。そこで、神の恵みが無尽蔵に与えられていることを知ります。自分が何を考え、何をしているのかは全く関係ない、神の圧倒的な主権で事を行われているのです。

エペソ 3 章の前半には、奥義が啓示によって知られること、その奥義と交わることについて書いてあります。奥義とは、神が豊かな知恵によって行われていることを、私たちには隠されていることを、ご自分の意向で私たちに明らかにすることです。神ご自身のなされることは、私たちが思ったり、願ったりすることとは真逆のことさえあります。しかし、そうしたことを超えて、神は私たちの霊に、ご自分の知恵を教えてくださいます。一方的に。その神の絶大なる安定感に、私たちの魂は驚き、そして深い信頼を寄せるのです。「どんなことがあっても、私は大丈夫なのだ。」ということです。パウロは言いました、「ピリ 4:13 私を強くしてくださいる方によって、私はどんなことでもできるのです。」

## 2B 人の能力で神を測る過ち

そして、先に話しましたように、私たちはどうしても、自分で理解して把握したいと欲します。そのために、私たちは神に願っているようで、自分で理解できる範囲で、自分の能力で可能な範囲で、願っていることが多いです。

ユダの王アハズの時代、北イスラエルの王とアラムの王が結託して、ユダを攻めてこようとした。そこで、「王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。」とあります(イザヤ 7:2)。動揺し、恐れに満たされたのです。けれども、そこにイザヤが現れます。そして、攻めに来ないという、神のことばを告げます。そして、こう告げるのです。「あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。(7:11)」けれども、アハズは、「私は求めません。」と答えます。アハズは、自分の能力を超えたことを求めることを拒んだのです。自分の力、自分の知恵に留まることを選びました。そして、アッシリア帝国にアラムとイスラエルを攻めてくるように頼むのです。貢ぎ物を持っていき、攻めてもらうように頼みました。そして、実際にその通りになりました。ア

ツシリアは、アラムを倒し、そしてイスラエルも倒しました。けれども、アッシリアはそれで飽き足りず、ユダにまで少しずつ攻め取って行ったのです。アハズは、自分の理解できる範囲にすべてを留めたいと願ったために、救われるどころか、虐げられ道に陥って行きました。

### 3B 神の働き

イザヤが、「あなたの神、主に、しるしを求めよ。」と呼びかけました。これは、主を試みることはありません。自分の理解の範囲を超えて、自分の能力を超えて、神が神として行われることに期待をかけることです。神の能力にしたがって願うことです。そうした形で、試しなさいと主が命じているのは、預言者マラキが、十分の一の献げ物で試しなさいという主のことばを告げた時ですね。主のみこころを行おうとする時に、自分の理解や能力の範囲ではなく、主の能力によって願う時に、私たちは主の御業を見ることができます。そのようにして、私たちは主を体験しないとイケないですね。頭で知っているのではなく、本当に主を知るのです。主の真実を知るのです。確かに、主は生きて働いておられることを知るのです。この積み重ねによって、私たちの信仰が、生きておられる主に対する信頼となります。

思い出すに、チャック・スミスの生まれた背景を、思い出します。彼のお姉さんが、まだ幼い時に髄膜炎にかかりました。痙攣を起こし、息も止まりました。に至る病にかかりました。お母さんは、家のすぐ近くの教会に連れて行き、牧師に祈ってもらいました。牧師が言いました。「今、ここにいる子から目を離しましょう。主に目を留めましょう。」そうしたら、その子、ヴァージニアさんは癒されたのです。問題を持っているその子から目を離しましょう、という牧師の勧めは、とても大事です。自分の理解、自分の能力から目を離すのです。主に目を留めるのです。ちょうど、それはアブラハムが、百歳の時、妻サラが90歳の時にイサクが生まれた時のようです。「ロマ 4:19 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。」自分たちの力や知恵から目を離したのです。

そして、主のお働きは、お姉さんが奇跡的に癒されたことだけで終わりませんでした。その時に、お母さんは、自分自身を主に献げると誓っていました。間もなくして、チャックが生まれたのです。ちょうど、サムエルの母ハンナのように、「私は、この子を通して、誓ったことを果たします。」と言ったのです。それで、彼がとても幼い時から、聖書の知識でいっぱいになりました。英語のアルファベットは、聖書から学ばせたとのこと。ヴァージニアさんが癒されたことは、主のお働きです。けれども、その後でチャックが、幼い時から聖書に親しんだということ、これも主の働きです。彼の聖書を教える奉仕で、どれだけの人々が救われ、癒され、変えられていったことでしょうか。

## 2A 内に働く御力

### 1B 内なる人に働かれる御霊

本文を見てください、主が行われるのは、「**私たちのうちに働く御力によって**」とあります。私たち

の中で、ご自分の力を働かせます。このパウロの祈りの始めは、「どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。(3:16)」とあります。私たちは、何か自分の周りの環境が変わることで、主が生きて働かれるのを見たいと願います。しかし、主はしばしば、周りの環境を変える前に、私たちの内でご自身の力を働かせます。私たちを変えようとされるのです。

ダニエルのことを思います。ダニエルと友人三人が少年の時にバビロンに捕え移されて、王に仕える準備のため、王のごちそうを食べなければいけませんでしたが、けれども、その肉によって自分たちを汚すまいと決心して、それで宦官の長に頼むのです。彼は、もしダニエルと友人たちが痩せこけてしまったら、職務怠慢で殺されてしまうかもしれません。それで、自分たちを試してくださいと願います。野菜だけを十日間、食べるようにさせてください。それで、他の少年たちの顔つきと比べてくださいと願うのです。それで、彼らの顔つきは、なんと他の少年よりも良く、からだつきも良かった、とあります。ダニエルと友人たちの内に、神の御力が働いているのです。

ここで大事なものは、ダニエルの志自体にも、神が力をもって働かれていたことでしょう。自分たちの身を汚すまいと心に定めたのですが、その心定めにも、主が働きかけていたのだと思います。だからこそ、勇気をもって宦官の長に進み出ることができたと言えます。「ピリピ 2:13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」

## 2B 肉の力からの救い

ここで、私たちが受ける訓練は、自分の力、生まれながらに持っている力に頼らないことです。肉の力に頼らないことです。先ほどから申し上げているように、私たちはどうしても自分の知恵や理解に頼ろうとします。知恵や理解の中で、それを神に当てはめて祈ることさえします。自分の理解のことができるだけで祈ってしまう傾向があります。同じように、自分の肉の力によって、主のみこころに従おうとする傾向があるのです。主に命じられていることを、私が行っていきまると、御霊の力ではなく、自分の力でやろうとしてしまうのです。

そこで主は、肉の力で成し遂げようとするをお許しになることがあります。自分でできると思ってしまうので、いかにできないか、肉が弱いものなのかを知るために、そのまま自分の力でやりとげようとする私たちを、そのまま見守ることがあります。ペテロがそうでした。イエス様は、サタンがペテロをふるいにかけるように、神に願い出たら聞かれた。けれども、イエス様が執り成しをされたので、信仰はなくならないようにした、ということを言われました。ペテロは、「ルカ 22:33 主よ。あなたと一緒なら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」ペテロは、本気でした。けれども、ゲッセマネの園で、ペテロが祈っていないといけないのに眠ってしまっていた時に、イエス様が言われました。「霊は燃えていても肉は弱いのです。(マタ 26:41)」

そして、ペテロは、死であろうと覚悟できておりますといった肉の力が、召使いの女が、「この人も、イエスと一緒にいました。」といった言葉で、「いや、私はその人を知らない。」と言ったのです。三度も、イエス様を知らないと言いました。(ルカ 22:54-62 参照)このように、霊は燃えていても、肉が弱いのです。イエス様は、振り向いてペテロをご覧になりました。そして、イエスご自身が、鶏が泣く前に、わたしを知らないと言った三度言う、と言われたことばを思い出して、激しく泣いたのです。

このつまずきをペテロは経験しました。もはや彼は、自分の肉に頼る、自分の力に頼るということ拒み続けたのです。そうではなく、御霊が自分の内で働くように自分自身を任せました。同じように、カヤパを含む指導者たちが集まっていた時に、ペテロは聖霊に満たされて、イエスこそが、救われる名であると大胆に宣言しました。(使徒 4:8-12)彼がすごいのではないのです。むしろ、彼は自分の力がどれほど弱いか、自分自身が頼りにならないかを知っていて、肉を働かせなかったにすぎません。聖霊に満たされて、語りました。

### **3A 願うところ、思うところを超える方**

#### **1B 異なる神の思い**

そして次に、改めて「**私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて**」というところに注目したいと思います。主が力をもって働かれる時、それは自分の願いや、思うところと異なることがしばしばなのだ、ということです。主のなされることが、私たちの願いや思いをはるかに超えているために、主の思いが私たちと異なってしまうのです。自分自身は、「主よ、これは一体どういうことですか？」と首をかしげることや、「主よ、これは間違っているのではないですか？」と訴えるようなことが、多々あるということです。イザヤは、こう預言しています。「55:8-9 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——【主】のことば——  
9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

主は、よみがえられてから、弟子たちに、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と言われました(マタイ 28:19)。あらゆる国の人々とはっきり言われました。しかし、聖霊がエルサレムの弟子たちに降り注いで、彼らはエルサレムで主のみことばを語りましたが、エルサレムから出ていませんでした。ところが、迫害が起こりました。ステパノが殉教したのです。それで、使徒たちはエルサレムに踏みとどまりましたが、他の人たちは、周囲のユダヤとサマリアに逃げて行ったのです。ステパノが死んでしまったという悲しい出来事に、私たちは、どこに、みこころが見いだされるのか？と思うでしょう。そして、周囲に逃げている信者たちは、不安と恐れが先立っているでしょう。しかし、それこそが聖霊の導きだったのです。主の命令は、あらゆる国の人々です。ユダヤ人ばかりがいるエルサレムから出て行かなければいけなかったのです。

それで、ステパノと同じように執事に選ばれていたピリポが、サマリア人に福音を宣べ伝えまし

た。すると、数多くの人たちが救われました。水のバプテスマを受けました。エルサレムからペテロとヨハネが遣わされて、彼らが祈ると、サマリア人たちは聖霊のバプテスマを受けました。

しかし、それだけではありません。逃げて行った人々は、さらに北へ上がって行きました。逃げている人々の多くは、ギリシア語を話すユダヤ人でした。やもめの配給で、なおざりにされていると感じたのが、ギリシア系のユダヤ人です。そのギリシア語を話すユダヤ人が、ユダヤ人ではない人たちに、福音を語って行ったら信じて行ったのです！そして、アンティオキアに大勢、異邦人がイエス様を信じて行ったのです。このようにして、彼らは逃げていくという、非常に否定的な行動の中で、実は神ご自身の後押しがあって、神のみこころである、あらゆる国の人々を弟子としなさいという命令を守って行ったのです。

私たちが、主の命令を守るといったら、何か、格好いいことを考えませんか？何時間も祈りをしていた時に、みことばが与えられました！ということで、人々に福音を語ったら、救われました！とかいうのであれば、格好いい話になります。けれども、結構、みっともない形で主は彼らを導かれていたのです。

そういえば、カルバリーチャペルは、チャックの趣味を聖霊が用いたところから始まっています。今や、サーファーのメッカとも言われる、ハンテントン・ビーチから離れたくなかったからです！自分の赴任の教会にずっといたかったけれども、自分の説教のネタが二年分しかなかったので、それ以上するならば、どうすればよいだらう？ということで、講解説教(expository preaching)を始めました。第一ヨハネを一年間やって、それからローマをやりました。そして、ハーレーの聖書ハンドブック(Halley's Handbook)で、聖書全巻の通読に基づく礼拝説教が勧められていたので、聖書全体を語れば、ずっとサーフィンできるじゃん！ということになりました。

あらゆる国の人々とイエス様が言われているのに、それでも、コルネリウスの一家に福音をペテロが語った時は、彼は、天からの幻に対して、「主よ、私は汚れた動物を幼い時から、食べたことがありません。」と答えました。また、異邦人の使徒として召されたパウロ自身が、アジアだけで福音を語っていたのですが、御霊が禁じたのです。福音を語るのを、御霊が禁じることがあるのでしょうか？ありますね。これも、私たちの思いと主の思いが異なりますね。けれども、それは、さらに、もっともっと大きな、神のみこころがあったのです。みこころは、「あらゆる国の人々」なのです。パウロの陣地とも言えるアジアから離れて、ヨーロッパ、ギリシアに行くために、御霊に禁じられるという、ちょっと惨めな思いをして、彼は導かれました。

## 2B 神の豊かな知恵

神の知恵は、このように、あまりにも賢いので、私たちのちっぽけな知恵や理解では、到底理解できないことが多々あります。神の知恵は、人の愚かさをういて、それで人の賢さを愚かにすると



いう方法を取られます。パウロは、エペソ 3 章で「教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされるためであり」とあります(10 節)。きわめて豊かな知恵なのです。だから、私たちは自分たちで何とか把握しようとしても徒労に終わることが多いですが、神によって、その渦中に置かれる時に、いつのまにか主のみこころが示されていて、自分でそれを行っているということがあります。私たちは、これから主のお働きに入っていくのではなく、すでにお働きの中に入っているのです。次の神の働きのために、今、私たちの内で整えてくださっています。

アブラハムのことを先に、少し話しました。彼とサラの間にイサクが生まれました。彼が育ちました、もう十代後半だったのではないかと思います。その時に主が、アブラハムに言われます。「創 22:2 あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」主は、アブラハムに何度となく、あなたの子孫によって祝福される、あなたの子孫は星の数になると約束されていたのです。それで、ようやくイサクが生まれたのに、そのイサクを屠りなさいと命じておられるのです。このことこそ、滑稽の極みです。人間的には、到底承服できないことです。まともに考えたら、気が狂いそうになるでしょう。

ところが、アブラハムは従います。続けて読むと、こうあります。「22:3-4 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。」何のためらいもなく、主の示されている山に向かうのです、イサクを連れて。なぜ、何のためらいもなかったのでしょうか？アブラハムは、イサクによって神の国民が生まれることを信じていました。けれども、彼を屠ることもみこころです。どちらも信じていたのです。

そこで、どちらも信じている中で、アブラハムは、イサクは取り戻せると思ったのです。つまり、彼は死んでも、また生き返るのだと思ったのです。その思いが、なんとキリストの復活を予め示しているものなのだとすることを、ヘブル書の著者は言います。「ヘブル 11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。」

ここに、神の極めて豊かな知恵が隠されていたのです。主がアブラハムに命じられた時に、「あなたが愛しているひとり子イサクを連れて」と言われましたが、これは、「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」という言葉が込められているのです。神がアブラハムに命じられたのは、ご自身が父なる神として、愛する御子に行われることだったのです。そして、アブラハムは、自然とイサクを取り戻すことができると思ったのですが、それまた、神ご自身が、ご自分の子が死んでも取り戻すことを意図されており、復活を示していました。

### 3B 信じ、従う心

こんなこと、だれが知る由があるでしょうか？だから、神は隠れた意図があるのです、知恵にあふれた意図があるのです。そして、それを私たちに明かしていかれるのですが、私たちが渦中にいる時、私たちの思いや願っていることを、はるかに超えてことを行われるのだと知らないといけません。私たちは、理解しなさいと命じられていないのです。信じなさいと命じられています。なぜなら、私たちを神はこよなく愛されていて、私たちをご自身の栄光のための器として、当事者にしておられるからです。

当事者ほど、全体像を知ることが難しい人はいません。他の人は、遠くから眺められるので、何が起きているか分かって、その渦中の人にとっては、目の前のことしか分からず、物事が自分に悪く働いているように見えることが多々あるのです。しかし、主は、確実にご自分の知恵を働かせて、事を行われています。その、主のしておられることに身を任せる時、主は御霊によって私たちの中で働いてくださり、私たちの思いや願いをはるかに超えて、事を行われるのです。